

平成30年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼小一貫教育において生活と学習をつなぎ、同年齢や異年齢で協働的に探究を深め、多様な能力や個性的な才能を引き出す「生活学習力」を育成する教育課程の研究開発

2 研究の概要

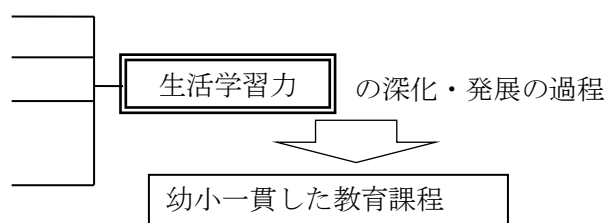
子どもの多様な能力や個性的な才能は、生活と学習をつなぎ往還させることで引き出され、高まることに着目し、子どもの発達段階に即して「生活学習力」を育成する、幼小一貫の初等教育の教育課程を開発する。具体的には、①幼小9年間を発達に応じて、初等教育前期（幼3～4歳）－初等教育中期（幼5歳・小1～2年）－初等教育後期（小3～6年）の3期に分ける。②「生活学習力」の育成を目指す「なかよし探究」の時間を全期に特設する。③この時間は、1)異年齢活動を積極的に導入し、2)個と協働の探究を推進する生活経験カリキュラムとして実施する。また実施に当たっては、3)子ども独自の探究と子ども間相互の探究の双方を可能にする学習の「場」を構成し、4)「めあて」と「ふりかえり」を恒常的に行い、学びの自覚化を促し、自律的な「生活学習力」を育成する。④「生活学習力」について、量的質的变化に着目する評価方法を開発する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

「生活学習力」の育成に関して、次の5つの仮説を設定し、「生活学習力」育成の系統性や構造的なあり方を追究する。「生活学習力」の深化、発展する過程を明らかにすることにより、幼小一貫した教育課程の編成を目指す。

- ① 段階的、系統的に育つ……発達の
- ② 生活から学習を立ち上げる……経験的
- ③ 異年齢活動で育ち合う……協働的
- ④ 独自と相互の探究で育つ……判断・実行する
- ⑤ めあてとふりかえりで育つ……自律した



仮説1【学びと発達】

子どもの発達をふまえ、生活と対象との関係の質的变化を初等教育前期（幼3～4歳期）、中期（幼5歳期・小1～2年）、後期（小3～6年）の3期で捉えることによって、段階的、系統的に生活学習力を育てることができる。

仮説2【生活と学習の往還】

生活から学びを立ち上げる環境をつくることによって、経験に根ざした問いをもち自ら解決するとともに、その学びを生活の中で見直し活かすことで、生活学習力を育てる生活経験カリキュラムを構成することができる。

仮説3【学び文化の醸成】

異年齢活動環境を構成することによって、学び文化を醸成し、社会的責任と役割を伴う協働的な生活学習力を育てることができる。

仮説4【学習の「場」の構成】

子どもの発達の質的变化に応じて、「独自の探究」と「相互の探究」の往還が可能になる、学習の「場」を構成することによって、判断・実行する生活学習力を育てることができる。

仮説5【学びの自覚化】

活動における「めあて」や「ふりかえり」の質を高めることによって、子どもの自律的な生活学習力を育てることができる。

(2) 教育課程の特例

第1～2学年では、「国語」、「生活」、「特別活動」の一部を削減し、「なかよしひろば」の時間を設置。第3～4学年では、「国語」、「社会」、「特別活動」、「総合的な学習の時間」の一部を削減し、第5～6学年では、「国語」、「社会」、「算数」、「理科」、「家庭」、「特別活動」、「総合的な学習の時間」の一部を削減し、「なかよしラボ」の時間を設置。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

①「生活学習力」の具体化

本研究では、「生活学習力」を以下のように定義している。

「多様な能力」や「個性的な才能」の発揮を目指して、自立的で協働的な探究を通して「生活・体験」と「活動・学習」とをつなぎ往還させることで育まれる力。すなわち、自分や自分のまわりの生活を見つめ、生活を向上させようとする動機から問題を設定し、その問題を解決するために具体的な計画を立て、長期に渡ってねばり強く追究して生活を変えていく力。

本研究で大切にしていることは、子ども自身の生活に根差した問いをもつことである。用意された活動や与えられた課題ではなく子ども自らが興味関心をもち、主体的に活動・学習を進め問題を解決していくことで自分の生活を向上させ、また、新たな問題を見つける、その往還の中で「生活学習力」が育ち、その結果「多様な能力」や「個性的な才能」が育まれると考える。

初等教育前期では、「生活・体験」と「活動・学習」を区別して捉えることは難しい。生活そのものを活動と同様に探究し、様々な直接体験を重ねることで生活を再構成し、家庭だけでなく園も自分の生活の場となり、自らがかわる対象物や経験を広げていくと考える。初等教育中期では、生活そのものを活動と同様に探究するが、生活の場が広がったり、直接体験だけでなく聞いたこと読んだことなどの間接体験も自分の体験として取り入れたりするようになる。また、興味関心事を自分の問題として生活から取り出し客観的に捉えられるようになり、「生活・学習」と「活動・学習」が分化し始める。初等教育後期では、人的つながりや歴史など目に見えないものも自分の情報として取り入れられるようになり、生活が広がったり深まったりする。客観的思考の高まりや様々な追究の方法を得て、「活動・学習」は、「生活・体験」とは分化して自分の見通しや計画の中で進められるようになる。

□ 子どもの育ちを三つの軸で捉える — 「9年間の探究の姿」

カリキュラムを作成するにあたり、仮説に基づいた、三つの期「初等教育前期(3～4歳)」「初等教育中期(5歳～2年)」「初等教育後期(3～6年)」と、「学びの源」「活動による学び」「自律的な学び」の三つの軸で捉えた。

□ 「生活学習力」を育てる五つの力

これらを軸に、通常の保育、学習場面、「なかよし探究」の時間、生活場面すべてから子どもの姿を取り上げ「9年間の探究の姿」として整理した。「学びの源」から立ち上がった活動・学習は「活動による学び」で探究が深まり、そのことが「学びの源」を豊かにする。豊かになった「学びの源」からまた活動・学習を立ち上げ「活動による学び」に向かう。そして、「自律的な学び」がそれらの活動を支えると考えられる。このことにより「なかよし探究」で得た情報や活動・学習の仕方が普段の活動や各教科の学習に影響を与えたり、また、日常の活動・学習の深化が「なかよし探究」の時間に生かされたりしていることが明らかになった。「生活学習力」は、「なかよし探究」と他教科、領域の活動・学習両方の場で互いに影響を与えながら育っていくことがわかった。そして、「9年間の探究の姿」から、「生活学習力」を育てる力として、次の五つの力を捉えた。

- 社会の一員としての自覚をもって生活を営む力
(安定、自立、自律、自己発揮、枠組みの捉えなど)
 - 自分に関連付けて「生活」をみつめる力
(気づき、不思議さの知覚、問いをもつ、視野の拡張、対象の選択、独創性、つなぐ力など)
 - 課題を解決するためにねばり強く追究する力(自分事にする、見通し、ふりかえり、失敗の受け入れと改善、計画性、試行、工夫、比較、情報の活用など)
 - 周りの人と協働して探究する力
(表現、発信、受容、応答、自己調整、状況判断、柔軟性、友達との共有と比較など)
 - 自律的に学びを進める力(「学び文化」の形成と伝承、他者や社会との関係性の中で自己を捉える力、学びを組織化する力、企画・調整力など)
- 「生活・体験」と「活動・学習」を往還することで五つの力が育まれ、そこから「多様な能力」や「個性的な才能」が伸びていくと捉えた。

②「生活学習力」を育成するための教育課程

ア、めざす子どもの姿

	めざす子どもの姿
前期	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の仕方を知り、安定して生活する。 ・多様な体験をしながら諸感覚を働かせ、自己発揮する。 ・友達と同じめあてをもち、共に活動することを喜ぶ
中期	<ul style="list-style-type: none"> ・各時間や活動のめあて、見通しをもちながら生活する。 ・生活の中から課題を見つけ、経験を生かしたり友達と協力したりして学習や活動に取り組む。 ・相手の立場を思いやりながら、積極的に自分を表現する。 ・お互いの良さを認め、自分たちの生活をよりよくしようとする。
後期	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中で疑問に思ったことや調べてみたいと思ったことから課題を見つけ、その課題について、計画的に「独自の探究」を進め、粘り強く解決しようとする。 ・自らの探究について、常に「ふりかえり」と「めあて」をもち、自律的に課題に向き合おうとする。 ・探究で得た成果を、さらなる「生活・体験」に生かし、生活をより深く捉えようとする。 ・異年齢の相互の学び合いを通して、より分かりやすく伝えようとしたりおたずねをしたりして、互恵的な学びの深化をはかる。 ・社会の一員としての自覚を持つ。

イ、「生活学習力」を育成する教育課程の特徴

- 幼小9年間を、生活と対象との関係の質的变化に応じて3期で捉える。
- 生活と学習を往還させることで多様な能力や個性的な才能を育てる。
- 年間を通し、異年齢探究活動「なかよし探究」を継続的に行う。
- 「独自の探究」と「相互の探究」の往還が可能になる学習の「場」を構成する。
- 「めあて」「ふりかえり」によって学びの自覚化を促す。

ウ、「なかよし探究」で育つ資質・能力

「『生活学習力』を育む五つの力」をカリキュラムの中心とし、五つの力が3期でどのように育つか、実際の姿から以下のように捉えた。

	社会の一員としての自覚をもって生活を営む力	自分に関連付けて「生活」をみつめる力	課題を解決するためにねばり強く追究する力	周りの人と協働して探究する力	自律的に学びを進める力
初等教育前期	・通常学級とは異なる友達、教師、場所の中で、異文化に適応し、自分の居場所を見つけ、自己発揮する。	・活動の中で周りの人やものから得たことを、自分の生活に取り入れたり生かそうとしたりする。 ・友達との共通の目的のために、試しながら工夫する。 ・多様な立場の人と関わる中で、葛藤を味わったり気持ちに折り合いをつけたりし、状況や相手に合わせて自分の気持ちや振る舞いを調整しながら、共に取り組もうとする。			・体験を振り返り、意味づけてもらったり認めてもらったりすることで、繰り返し取り組み遊び込む。
初等教育中期	・通常学級とは異なる友達、教師、場所の中で自分らしさを発揮する。	・自分の生活から気づきや疑問を生みだし、学びの対象として関わる。	・自分たちの活動をより面白くするために、工夫したり試行錯誤を繰り返したりする。	・自分の考えをわかりやすく表現したり、相手の思いや考えを受け入れたりして、友達と一緒に、活動を進める。	・活動をふりかえり表現することで、次のめあてをもって活動に取り組む。
初等教育後期	・異年齢集団の中で、自分の役割を意識し、より良い探究生活を営む。	・ラボのテーマを意識して自分の生活を見つめ、探究するに値する課題を設定する。	・課題解決へ向けて、具体的な手段や道筋を工夫し、ねばり強く探究する。	・ラボ内や小グループの中で考えを練り合い、互いに高め合いながら探究する。	・ラボのテーマに沿った自分の課題を設定し、独自の探究や相互の探究を進め、自分の学びを進める。

エ、「生活学習力」を育成する教師の構えと指導法

「生活学習力」は、ある活動に特化して育つものではなく、生活と学習をつなぎ往還させることで育成され、「なかよし探究」と他教科、領域の活動・学習両方の場で互いに影響を与えながら育っていくものである。ただし、それは9年間で一貫した教師の指導法や心構え、評価に対する考え方に支えられているからである。また「なかよし探究」を実施するための時間や人、場という環境を整えるための工夫を幼小全員の教師で取り組めたことにもよる。

	初等教育前期・5歳	初等教育中期	初等教育後期
自分の生活そのものを学びの対象とできるような工夫をする。	<ul style="list-style-type: none"> 多様な働きかけが可能で、継続してかかわれる環境を構成し、豊富な体験を保証する。 五感や体験の言語化を通して、経験として蓄積されるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 体験や学びを、教科書や教室の中だけに縛り付けず、休み時間や放課後、家庭生活の中にも広がりを見つけられるようにする。 体験や視野を広げる助言をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「あなたにとって、その研究がもつ意味」について問うような出方を行う。
どの学年の子どもも主体的に活動できるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 年下の子どもが自己発揮できる内容や方法を工夫する。 学級で取り組む活動のテーマやグループを子どもと相談しながら決める。 遊びの選択がしやすいようにお知らせの方法を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動グループを自分で選択する。 テーマの中で、具体的な探究方法や素材は子どもの発想に任せる。 自分の記録ノートをもつことで、なかよしひろばへの意識を継続させたり、見通しをもったりできるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の興味ある課題に基づき、ラボを選択する。 教師は示唆を与えるより待つことで、子どもが相互に探究を交流する中で吟味していくことを促す。
一人ひとりがその場で安定して過ごし、探究が深まるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 安心して活動できるように、場や人を知る活動から始める。 したい遊びをじっくりと取り組める環境、友達の遊びが視野に入る場の構成や環境を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもなりの工夫を教師が言語化したり、発表する場を設けたりしてフィードバックする場を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の専門性を生かし、学び方や深め方、着眼点などのアドバイスをする。
	<ul style="list-style-type: none"> 「なかよし探究」で得たことを通常の学級で生かせる場を作ることを意識する。 		

<p>対話やかかわりが生まれ、互いの良さに気づくようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と過ごすことの楽しさ、違うことのおもしろさなど、多様性を受け入れて過ごせるようにする。 ・3学年の小グループを作り、誰を視野に入れるとよいかわかりやすくする。 ・異年齢の子どもが出会いやすいよう、コーナーによる環境を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3学年でのグループを作り、協同しながら活動を進められるようにする。 ・一人ひとりの子どもが考えをもてるように待ち、様々な意見を出し合えるようにする。 ・他グループの探究を発表し合う場を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・似た研究テーマでグループを作ることにより、互いにアドバイスできるようにする。 ・グループで共同研究に取り組むことにより、そこで得た方法や考え方を自分の探究に生かせるようにする。
------------------------------------	--	---	--

③「なかよし探究」の実践

ア、「なかよしタイム」（初等教育前期・5歳）の取り組み

◆「なかよしタイム」活動の目標

3・4・5歳児の子ども達がいろいろな環境や友達とのかかわりの中で自己発揮し、友達と力を合わせたり探究したりする楽しさを味わう。

◆「なかよしタイム」の実施方法

5月～6月に4・5歳児で行う「なかよしタイムⅠ」と、9月～3月に3・4・5歳児で行う「なかよしタイムⅡ」にからなっていた。3歳児は、通常学級で安定して生活できるようになる9月以降の活動から参加することで、より主体的に活動ができるようにした。

◆「なかよしタイム」の活動のポイント

- ・どの学年の子どもも主体的に活動ができるようにする。5歳児が年下の子どもをフォローすることが当然と思わず、どの子どもも持っているそれぞれの考えを引き出すことで、主体的に活動できるようにする。
- ・社会性を育てる活動として異年齢活動を行うのではなく、同じ目的に向かってそれぞれが独自のめあてをもち、「探究」を行うことで、異年齢での学び合いや学び文化の伝承が行われることを目指す。

〈異年齢学級の一日のスケジュール〉

「あさのかい」「学級全体活動（探究活動）」「間食」「選択活動」の順に行った。

「あさのかい」で集まることで、登園時に通常とは異なる環境に不安をもちやすい子どもも、居場所を見つけやすくなり、その日のスケジュールを知ることで見通しが持ちやすくなった。

次に「学級全体活動（探究活動）」を行うことで、「今日は『なかよしタイム』で過ごす1日である」ことを感覚的に受容しやすくするとともに、小グループや学級のメンバーに親しみをもちやすくなった。探究活動を行うことを通して、学び合いや文化の伝承も見られやすくなった。

「学級全体活動（探究活動）」後は間食を行い、そこでも小グループの友達と関わりをもてるようにした。その後「選択活動」を行うことで、グループの友達を意識することが自然とできるようになり、「学級全体活動（探究活動）」でしたことの続きをしようとしたり、「次は何をする？」と友達にたずねて遊びを選択しようとしたりする子どもが格段に増えた。

◆今後の課題

指導計画の改善：本研究により、「探究活動」を通して異年齢での学び合いが深まることに手ごたえを得た。しかし、「なかよしタイム」全体の日程のもち方や「探究活動」の内容・進め方、コーナーの内容・運営方法などには改善の余地がある。今後も、子どもが主体的に取り組み、より一層「生活学習力」を伸ばせるように指導計画を改善するとともに、通常保育での育ちとつなげていけるようにしたい。

イ、「なかよしひろば」（初等教育中期 5歳児、1～2年生）の取り組み

◆「なかよしひろば」活動の目標

5歳・1年・2年の子どもが活動を通して互いの良さを見つけ、経験を生かしたり友達と協力したりしながら探究することの楽しさを味わう。

◆「なかよしひろば」の活動内容

子どもたちは、自分が興味をもった「ひろば」を選択する。選択したひろばの中から5歳児1名に対

して1年・2年3～4名の混合のグループをつくり、「ひろば」のテーマに沿った探究を行う。初等教育中期では、活動を通して探究する楽しさに気がつき、協働して活動する中で学びを伝承させる。そして、3年生からの探究活動である「なかよしラボ」へとつながるようにする。

◆活動設定

昨年度の活動から「公開研究会へ向けての活動を意識した結果、子どもたちの活動を『発表』へ向かわせたことが原因で、『協働』と言える活動は少なくなってしまった。」という課題が生じていた。この課題を改善するために、すべての「ひろば」で、小グループを決める前や、決まった後で協働を大切に活動をよくとり入れるようにした。そして、協働的な活動を行う時間を多くとり、グループ内の人間関係がしっかり構築できた後で、公開研究会の「発表」に向けて活動させることにした。「発表」としては、「ひろば」ごとの探究の成果を出し物、お店やさん、展示といった方法で交流する「なかよしフェスティバル」を計画した。

ウ、「なかよしラボ」(初等教育後期 3～6年生)の取り組み

「なかよしラボ」は、探究テーマが類似する異学年の子どもが集まってグループを作り、その中で知的な刺激を与え合ったり、アドバイスをし合ったりしながら長期にわたって独自の探究活動を進め、そのプロセスをまとめ、個人、グループまたは全体で発表する「なかよし探究」の集大成となる活動である。

◆「なかよしラボ」活動の目標

小学校3～6年生による異年齢集団を形成し、生活や学習の中で見つけた追究課題を各個人がもち、それぞれの研究活動を支援し合い、学び合い、追究—発表—ふりかえりを恒常的に行いながら研究を深め、そのプロセスも学ぶ。

◆担当教諭の専門性を生かした12のラボ編成

「なかよしラボ」の活動は、各担当教諭の専門性や得意分野の知識や技能を生かしながら指導にあたる事が出来るようなラボを開設した。各ラボには、3年生から6年生まで各学年6～8名ずつ、計23～24名が在籍した。活動は基本として週に2時間である。

＜平成30年度の開設ラボ 12ラボ＞

- ・つくるラボ
- ・音と情報ラボ
- ・からだラボ
- ・ことばの表現ラボ
- ・マテマチカラボ
- ・スポーツラボ
- ・けんこうラボ
- ・郷土ラボ
- ・さいほうラボ
- ・サイエンスラボ
- ・自然ラボ
- ・フードラボ

初年度は、各教師の研究教科に関わるラボを設定していた。しかし、教科によっては児童の探究活動が行いにくいと思われるものもあった。そこで、昨年度からは担当教諭の研究教科にとらわれずに、各教諭の個性を生かしたラボを開設することにした。

◆学び文化の醸成

本研究において、ラボを異学年で編成する目的として、異学年で活動することに互惠性があること、また、学ぶことにおける社会的責任や役割を経験できることが挙げられる。

ラボ交流会は、半期に一度、異なったラボのメンバー6名が1グループを作り、その中で自分の研究について発表し合う会である。違うラボの活動の様子にも触れることができ、また異学年の話も聞けることで、子どもたちにとっても良い機会となっている。

◆生活と学習の往還

なかよしラボでは、身の周りの生活を見つめ、生活を向上させようとする動機から問題を設定する力を育てようと考えている。それは、充実した「生活・体験」と「活動・学習」との循環的な作用が「生活学習力」を向上させ、また、子ども独自の生活や課題追究が、経験に応じた多様な追究能力を高め、個性的な才能を引き出し、社会参加への意欲・関心をもたらすと考えるからである。

◆多様な個性を生かした新たな価値の創造

児童が自分の生活とつなげながら探究を行っている様子がうかがえる。このような生活とのつながりがみられる探究の課題は、児童の意欲が継続しやすい。反対に、自分の生活とのつながりが明確に見出せないような探究課題は、児童の探究意欲の低下を招きやすい傾向が見られる。

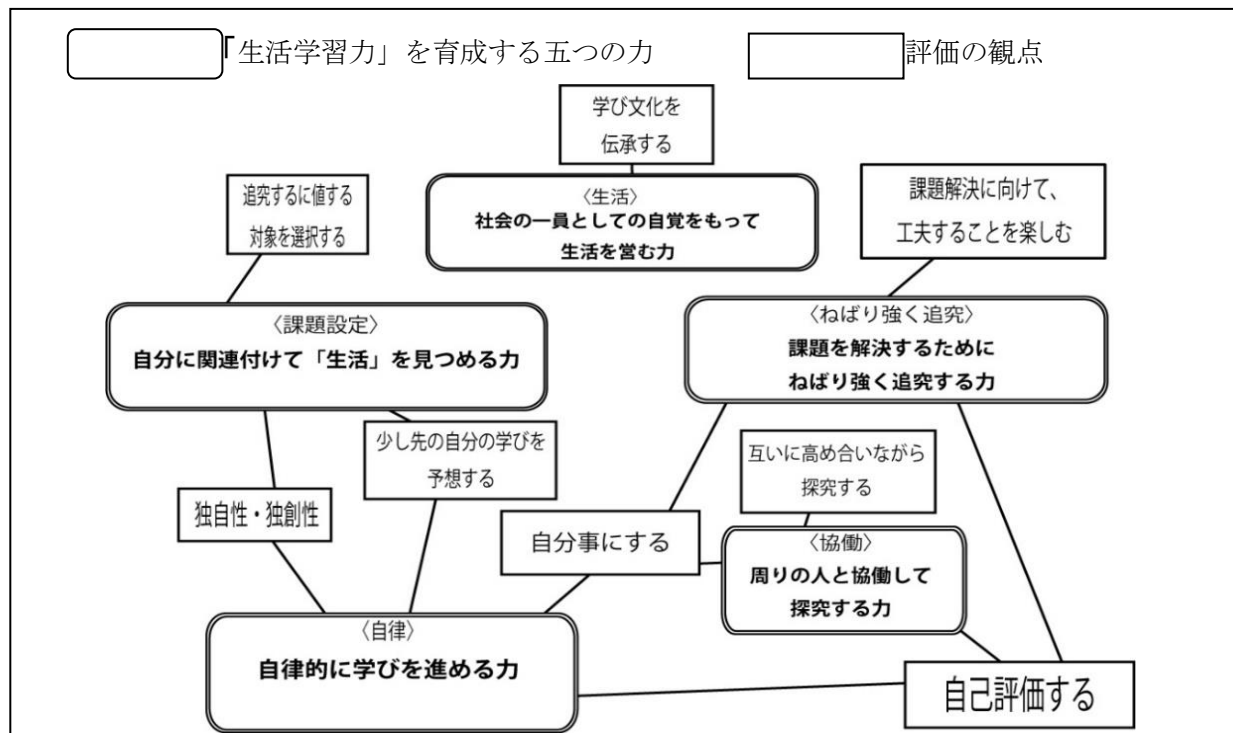
(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次 平成27年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○「生活学習力」の育ちの系統性や構造を研究し幼小一貫した教育課程を編成するための準備を行った。 ○「なかよし探究」や同年齢集団における具体的な子どもの姿から「生活学習力」の評価方法を検討した。 ○「生活学習力」の育ちにかかわる実態調査（「生活学習力アンケート」6月・2月、全学年対象）を行い、「生活学習力」にはどのような発達の特徴があるか、初等教育前期、初等教育中期、初等教育後期の三つの段階で捉えた。
第2年次 (平成28年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○「生活」の概念整理及び「生活学習力」の発達の系統性を明らかにするため、実際の子どもの学びの姿から、育てたい資質や能力を検討し、多面的に「生活学習力」を分析した。 ○「なかよしラボ」で取り上げているテーマや、「なかよしひろば」、「なかよしタイム」の活動の実際の姿から、カリキュラムの構成を進めた。「生活学習力」を育成するための教育課程の試案を作成し、「学びの源」「活動による学び」「自律的な学び」の三つ軸を設定した。 ○生活経験カリキュラムを構成するとき、幼稚園の5領域と、小学校の各教科との関連を見通しながら、関係性をもたせるようにし、「なかよし探究」の学びが各教科や日常の生活や活動にどう生かされるかを記録した。 ○「生活学習力」の育ちにかかわる実態調査（「生活学習力アンケート」7月、全学年対象）を行い、第一年次研究成果の評価とカリキュラムの改善を行うと共に、児童及び保護者にフィードバックを行った。
第3年次 (平成29年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○昨年度編成した教育課程に加え、「協働的生活学習力」の育成を目指す「『なかよし探究』で育つ資質・能力」を実際の子どもの姿から捉えた。 ○生活経験カリキュラムを「活動の履歴」として実践を基に表現した。 ○子どもの「学びを育てる評価」を開発した。 ○「生活学習力」の育ちにかかわる実態調査（「生活学習力アンケート」7月、全学年対象）を行い、第二年次研究成果の評価とカリキュラムの改善を行い、児童及び保護者にフィードバックを行った。
第4年次 (平成30年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○「なかよし探究」 <ul style="list-style-type: none"> ・三年目の課題を基に、より子どもの協働的・自律的な活動が行われるように、それぞれの「なかよし探究」の進め方を検討・改善した。 ・「なかよしタイム」（幼3～5歳）では、探究活動のテーマ及び「独自」「相互」の場の構成を検討・改善した。 ・「なかよしラボ」（小3～6年）では「生活と学習の往還」「独自の探究と相互の探究」について検討・改善した。 ○カリキュラム委員会 <ul style="list-style-type: none"> ・「生活学習力」の捉えについて整理し、「9年間の探究の姿」及び「生活学習力が育つ五つの力」を明確にした。 ・「生活学習力を育てる幼小一貫カリキュラム」として、「『なかよし探究』で育つ資質・能力」を編成し、評価の観点との関係を明らかにした。 ・生活経験カリキュラムを、「活動の履歴」として実践から捉えた子どもの具体的な学びの姿を基に表現し、前年度からの改訂を行った。 ・「生活学習力を育てる幼小一貫カリキュラム」について、各期に共通するカリキュラム編成の特徴及び教師の構えや各期の指導法の特徴を整理した。 ○評価委員会 <ul style="list-style-type: none"> ・幼小一貫した「生活学習力」を育成する評価についての考え方を明示した。 ・「生活学習力を育む評価」として、子どもの育ちをみとる観点及び指導の手立てを示す「評価の観点表」を完成した。 ・「評価の観点マップ」を用いることで、子ども一人ひとりの育ちを確認したり、日々の指導のふりかえりとしていたりすることを実際に確認した。

(3) 評価に関する取組

① 幼小一貫した「生活学習力」の評価の観点の作成

子どもの「生活学習力」の深化、発展を確認するために、幼小一貫した評価の観点を作成し、担任教師が実施する。この評価は、教育課程と教育実践のチェックであると共に、子どもの「生活学習力」を伸ばす指導と一体化したものであり、教師が一方向的に子どもの能力を点数化するものではない。



② 実践・活動状況調査

本研究における実践や活動状況の検討に向けて、随時実態調査を行い、活動記録などを基に検討する。短期的には指導評価として活用し、長期的には「生活学習力」の育成に及ぼす実践の影響を検討する。具体的には、期間の区切りごとにそれぞれの子どもの活動・学習過程を振り返り、生活経験カリキュラムの成果を実践にフィードバックすることでカリキュラムマネジメントを行う。

③ 異年齢協働活動「なかよし探究」の評価

「なかよし探究」の時間の設定の成果について、発達の差異のみえる協働的な学びの場として機能しているか、学び文化の伝承が行われ「生活学習力」が高まったかどうか、という観点から、取り組みの事前と事後を比較し、検討する。評価の観点表や観点マップ、活動記録や表現の分析のほか、保護者アンケートや子どものふりかえりなど、子どもが自律して目標に向かうように評価を活用する。

④ 研究開発の遂行に関する評価

研究課題が適切に進んでいるかを検討するために、公開研究会、運営指導委員会、園校内研究会等を開催し、教育研究者や他校他園の教師に外部評価を頂くとともに、統括委員会や幼小合同研修会等で自己評価を行う。

	評価方法等
第1年次 (平成27年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「生活学習力」の育ちにかかわる実態調査を実施した。 実施時期：6月、2月 対象学年：全学年（幼3歳児～小6年生） ・ 「生活学習力」にはどのような発達の特徴があるか、初等教育前期、初等教育中期、初等教育後期の三つの段階で捉えた。 ○ 初等教育前期、初等教育中期、初等教育後期における活動場面での評価、長時系列に見た成長過程の評価を行った。

	<ul style="list-style-type: none"> ・同年齢集団及び異年齢集団での活動（「なかよし探究」）における、子どもの探究の過程や成果を分析した。 ○ 実践事例を集積し、分析、検討し、「生活学習力」の評価方法を開発する手立てとした。 ○ 保護者－子ども－教師が評価を共有するために、懇談会や発表会、ポスターセッションなどによる相互評価の方法を開発・検討した。 ○ 校園内研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行った。（外部評価：運営指導委員会 8月21日・11月19日、文部科学省実地調査 12月3日）
<p style="text-align: center;">第2年次 (平成28年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 評価委員会を設置し、「生活学習力を育成する評価」について開発・検討した。 ・年度当初に各種の評価法による多角的な実態調査を行い、第一年次の研究成果を評価するとともに、児童・保護者と共有した。 ・実態調査をもとに、研究仮説の検討を行った。 ・初等教育前期、中期、後期における学習場面での評価、長期時系列に見た成長の過程での評価方法を観点で整理し、ルーブリックを作成した。 ○ 実践事例を集積し、実践事例の分析、検討、評価を行った。 ○ 校園内研究会等を開催し、第二年次までの研究成果を公表し評価を得た。（外部評価：運営指導委員会 8月5日、公開研究会 11月19日、文部科学省実地調査 12月3日）
<p style="text-align: center;">第3年次 (平成29年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○以下の通り、子どもの「学びを育成する評価」を開発した。 ・指導と評価を一体化した「学びを育成する評価」の観点を8観点に整理し、幼小一貫した「評価の観点表」を作成した。 ・幼小一貫した「生活学習力」を育成する評価の観点について考え方を明示した。 ・子ども一人一人の中に「生活学習力」のどのような資質・能力が育っているのかを確認する「評価の観点マップ」を作成した。 ・一年次・二年次と同じ内容で実態調査を行い、さらにいろいろな活動の質を高めるための要点に関して評価を進めた。 ○「生活学習力」の育ちにかかわる実態調査（「生活学習力アンケート」7月、全学年対象）を行い、第二年次研究成果の評価とカリキュラムの改善を行うと共に、児童及び保護者にフィードバックを行った。 ○ 次年度実施する追跡調査アンケート項目を作成・検討した。 ○ 校園内研究会及び公開研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行った。（外部評価：運営指導委員会 8月3日、公開研究会 11月2日）
<p style="text-align: center;">第4年次 (平成30年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○以下の方法により、研究成果の評価とカリキュラムの改善を行った。 ・第三年次に完成した「評価の観点表」及び「評価の観点マップ」を用い、子どもの「生活学習力」の育ちについて確認した。 ・「評価の観点マップ」を用い、教師の指導方法及び環境構成について振り返り、改善した。 ・「生活学習力」の育ちにかかわる実態調査（「生活学習力アンケート」7月、全学年対象）を行い、児童及び保護者にフィードバックを行った。 ・本研究開発事業4年間の子どもの生活学習力の育ちについて、「評価の観点マップ」及びポートフォリオ評価を中心に追跡調査を行い、育ちを確認した。 ・小学校1年生入学時における「生活学習力」の育ちについて、「評価の観点マップ」を用いた附属幼稚園出身者と外部入学者の比較を行い、子どもの育ちを確認した。 ・中学校1年生入学時における「生活学習力」の育ちについて、「評価の観点表」を基にしたアンケートを作成し、附属小学校出身者と公立小学校出身者の比較

	<p>を行い、子どもの育ちを確認した。</p> <p>○ 校内外研究会及び公開研究会等を開催し、最終年度研究成果についての評価を行った。(外部評価：運営指導委員会 8月8日、公開研究会 11月2・3日)</p>
--	---

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

「なかよし探究」における異学年による学びについては、子どもへのアンケート結果からみても、友達や異学年の仲間との学びが自分の遊びや学びに大きな影響を与えていることがわかる。また、「なかよし探究」の楽しさ、うれしさ、活動のよさについては、初等教育前期においては、「年長さんと遊ぶのが楽しい」「なかよしタイムで線路つなぎをして3人でやると短かったけど、4人でやると長くできたのがうれしかった」というように、異学年、特に年上の子と一緒に活動することの楽しさ、うれしさを感じる意見が多くあった。この中には、年長者への憧れや新たな活動の工夫を知ったことによる、自分の成長の意味合いが含まれていることは想像に難くない。初等教育中期においては、「知らなかった人と仲良くなれたこと」「みんなといっぱい技とかも知れるので楽しい」「色水を作っていて幼稚園の子が「それ作りたい」と言ってくれてうれしかった」といった記述が、同じく初等教育後期においても「自分で気づけなかったことが分かる」「テーマが違って、何かつながることがみつきり研究が膨らんでいく」「上の学年に教えてもらったり、下の学年に教えたりして自分が伸びている」というように、異学年と交流するよさ、学びの効果を子どもたちは自覚的に捉えている。ここから、「なかよし探究」という新設環境は効果があったと考える。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

①「個」と「協働」のバランス

昨年度の反省を生かし、「なかよしラボ」・「なかよしひろば」において「個」と「協働」の両立について取り組んだ。しかし、やはり週に一度の「なかよし探究」に担任以外の教師とのかかわりでは、通常学習同様の集団として育つ「協働」の深まりは難しいものとなった。

②「異文化」としての「異年齢」という捉え

一つの「環境構成」と捉えられる「異年齢活動」において、多様な「個」が異年齢集団の中で主体的に探究することで、「学び文化の伝承」「異文化での自己発揮」「多様性の受容」「様々な立場からの見方・考え方」などがより育った。さらに、ものの見方だけではなく、「人」として多様な面をもつことを知り、人間関係が深まった子どももいた。

そして、「異年齢」を「異文化」という側面から捉えることで、それぞれの子どもが自分のフィールドの「通常学級の文化」をもって「なかよし探究」に参加することにおいて、様々な「学級文化」の交流が生まれ、その中で自分らしさを発揮し、自分の居場所を見つけていく能力をつけていくことも、学びの土台として必要であることが確認できた。

ただし、「異年齢活動」という「環境構成」だからこそその育ちを、教師がしっかりみとることの重要性も再確認された。担任している子どもだけではなく、担当する異学年の子どもについてもみとり、担任や保護者と情報を共有することで子どもがより育つことをふまえ、今後の課題としたい。

奈良女子大学附属小学校 教育課程表 (平成30年度)

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的 学習的な 時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	272 (-34)	—	136	—	85 (-17)	68	68	—	102	34	—	—	17 (-17)	68 (+68)	850 (0)
第2学年	280 (-35)	—	175	—	87 (-18)	70	70	—	105	35	—	—	18 (-17)	70 (+70)	910 (0)
第3学年	220 (-25)	60 (-10)	175	90	—	60	60	—	105	35	—	52 (-18)	18 (-17)	70 (+70)	945 (0)
第4学年	220 (-25)	80 (-10)	175	105	—	60	60	—	105	35	—	52 (-18)	18 (-17)	70 (+70)	980 (0)
第5学年	165 (-10)	95 (-5)	170 (-5)	100 (-5)	—	50	50	50 (-10)	90	35	35	52 (-18)	18 (-17)	70 (+70)	980 (0)
第6学年	165 (-10)	95 (-10)	170 (-5)	100 (-5)	—	50	50	50 (-5)	90	35	35	52 (-18)	18 (-17)	70 (+70)	980 (0)
計	1322 (-139)	330 (-35)	1001 (-10)	395 (-10)	172 (-35)	358	358	100 (-15)	597	209	70	208 (-72)	107 (-102)	418 (+418)	5645 (0)

学校等の概要

1 学校名、校長名

学校名 ナ ラ ジョシダイガクフソクショウガッコウ 奈良女子大学附属小学校 校長名 きくさき ひろえ 菊崎 泰枝

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 奈良県奈良市百楽園1丁目7-28
電話番号 0742-45-4455 FAX番号 0742-40-2160

3 学年別児童数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	69	2	63	2	67	2	69	2	63	2	401	12

4 教職員数

校長	副校長	主幹教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	非常勤講師	短時間勤務教諭	教務補佐	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	1	13	1	1	9	4	1	1	1	2	0	36

※ 校長は奈良女子大学生活環境学部教授（併任） ※ スクールカウンセラーは幼小兼任

1 学校名、校長名

園名 ナ ラ ジョシダイガクフソクヨウチエン 奈良女子大学附属幼稚園 園長名 くぬぎ としお 功刀 俊雄

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 奈良県奈良市学園北1丁目16-14
電話番号 0742-45-7261 FAX番号 0742-40-2161

3 学年別幼児数、学級数

3歳児		4歳児		5歳児		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
48	2	46	2	45	2	139	6

4 教職員数

園長	副園長	教諭	養護教諭	短時間勤務教諭	実習助手	教務補佐	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	6	1	6	0	1	1	1	0	18

※ 園長は奈良女子大学文学部教授（併任） ※ スクールカウンセラーは幼小兼任

